

小泉八雲 「死者の文学」 覚え書き ⁽¹⁾ — 資料と考証 —

松村 恒

I am emphasizing, however, that one should
make an honest attempt to understand...

G. Cardona, *III* 12 (1970), 239.

小泉八雲という日本名を名乗る以前の来日前から、ラフカディオ・ハーン(2)の書きものの主題は多岐に渡り、総合的な理解にむけての困難を形成している。時として突拍子もないテーマへと筆が及ぶが、墓碑銘に関するエッセイはその一例と言えよう。『異国風物と回顧』に収められた「死者の文学」(3)は、市ヶ谷富久町在住時代に、自宅に隣接した瘤寺の墓地を散策し、墓石や卒塔婆の文字を筆写したことに由来するものである。通常の日本人にも理解が容易ではない碑銘が、八雲独特の直訳英語で与えられていて、この部分の和訳というか復文は、翻訳者泣かせと言えるだろう。この作品の原文と訳には以下のものがある。

[Ed.] "The Literature of the Dead," *The Writings of Lafcadio Hearn* 9 (Boston: Houghton Mifflin, 1922; Koizumi edition, 1923; large-paper edition Kyoto: Rinsen, 1973, 1988), 70-114.

「三」 「死者の文學」 『小泉八雲全集』 五（東京：第一書房、一九二九：学生版四卷 一九三二：家庭版六卷一九三七）、三五〇—四〇六〔大谷正信訳〕、『全訳小泉八雲作品集』 八 平井呈一訳（東京：恒文社、一九六四）、三三二—三七六Ⅱ 『仏の畑の落穂他』（東京：恒文社、一九七五）、三三二—三七六、「死者たちの文學」 『小泉八雲作品集』 二——随想と評論——（東京：河出書房新社、一九七七）、一八九—二二九〔仙北谷晃一訳〕。

管見に入った和訳は上記の三種類である。前二者は全集という性格からこの作品を飛ばすわけにもゆかず、やむなく付き合つて訳したという事情があるうが、最後のものは「選集」であるから、多々ある作品から一見すると避けて通りたくなるようなものをわざわざ選んで収載したのであり、訳者には何か思うところがあったのであろう。従つて先行訳を相当に改良した自負もあつたことと期待して頁をめくつていたところ、「阿弥陀経」〔訳者註——正しくは無量寿経〕（二〇五頁）といった様な注記が目についたので（八六・五七への注記参照、これは一度検討が必要なのではないかと思ひ、諸訳と原文とを対照させて、⁽⁴⁾ 氣の付いたことながら書き留めたのが本稿である。そもそもこうした作品には注記なしでは理解が困難であるにも拘わらず、訳者注は極めて少ないといった状態で、そればかりか、原注すらも断わりなく省略されていることがままある。ハーン・ルネッサンスと称して先行訳のあるものの新訳を出すことが盛んであるが、作品本文に即した注解作業は意外と乏しい。先行訳の旧漢字を新漢字に、旧かなづかいを新かなづかいに改めた程度では新訳を標榜する意義は薄い。先ずは本文の理解に関して正直にならなければ、真のハーン・ルネッサンスが到来したとは言えない。

各論に入る前に、諸訳比較の結果を先取りして述べておこう。直訳英語からの銘文の復元は、最初の訳者である大谷の功績である。これだけ見事な復元は他のなにびとによつても成し得なかつたであらう。これの背後には事情がある。実は大谷は八雲に依頼されて、墓碑銘などの資料を提供しているのである（七三・一五一—一六への注記参照）。この

作品中に呈示された実例のうちに、自分が提供したものの多くを見出し出したことであろう。「日本の仏教諺集」と共に本作品の訳者として、大谷は最適任者だったわけである。仏教の諺を収集した際にも現われていることであるが、大谷の仏教に関する知識には瞠目すべきものがある。経典からの引用文もその多くは出典を知っていたであろうが、残念なことにそれらは殆ど注記されていない。自明のこととでも思ったのであろうか、或いは知識を書き留めておく習慣が当時は希薄だったのであろうか。後の訳者たちは大谷の復元をただただ踏襲するばかりで、出典の検索の労を取った形跡は見られない。たまに出典に関する注記があっても、確認作業を行っていない。従って大谷が書き誤りをして、それに気が付く筈もなく、訂正されずに繰り返されてしまった。また大谷が正しいのに、後の訳者が誤っていることがらについては、如何に解釈したらよいのであろうか。第一書房版の全集はその出版年代の故に、確かに表記法などが古色蒼然としていて、それを新訳の必要性が説かれる理由にされたこともあったが、この全集の訳者達はその殆どが八雲と直接に接触のあった人物ばかりであり、また漢詩文などの素養は今日と比べて相当に高かった様である。本稿では一例を挙げたに過ぎないが、本邦初訳を多々含むこの全集の持つ意義と、先達の努力を過小評価してはならないことは、示し得たと思う。

—— ** —— ** —— ** ——

漢文経典の出所は特に断わらない限り大正新脩大蔵経（略号：大）に依る。他の略号として、AA=Analecta Anglica。

七〇・二一四（＝七〇頁二一四行）Shindareba koso … エピグラムとして引かれたこの諺は、八雲自身の編になる「日本の仏教諺集」に八二番として登録されている。⁽⁶⁾

七〇・七 a Buddhist temple : 「寺が一軒」(平井)「一軒のお寺」(仙北谷)。寺を数える量詞は寺、宇、堂などである。「佛寺が一字」(大谷)は正確である。

七一注一・鬼瓦に関するこの長い注を、平井は理由なく省略している。

七三・九—一一 Founded for the Hokke or Nichiren rite, the temple nevertheless passed, in the course of generations, under the control of other sects — the last being the Tendai : 諸訳は英文を正しく訳しているが、いずれも訳注はない。この英文は事実と反する記述であるが、これは後段で様々な宗派の銘文を披露するための布石で、八雲の故意の改変の可能性がある。瘤寺は確かに初め日蓮宗であったが、その後天台宗に一度変わっただけであり、それ以上の宗派の変更はない。瘤寺の縁起は、『プリンス通信』一五六—一五七号に引いた諸文献に記されている。

七三・一五—一六 under the patient teaching of an Oriental friend : 諸訳は誰のことを指しているか特定していない。日本の仏教に関することがらの情報提供者は雨森信成であることが多いが、この場合は大谷正信である可能性が強い。というのも一八九七年六月二八日付け書簡で大谷に、仏教の墓場にある銘文と彫刻の調査を依頼しているからである。Sanki Ichikawa, ed, *Some New Letters and Writings of LH* (Tokyo: Kenkyusha, 1925), No. CVII = pp. 218-220 (和訳は大谷その人の筆になるものがある。『全集』一五(一九三二)・二六—二八)。「仏教の諺」の課題でも大いに貢献した大谷のことであるから、今回も相当の材料を提供したものと推測される。石一郎の小説的伝記では瘤寺の住職に教示を受けたことになっているが、これは創作である。⁽⁷⁾ Cf. 一一四・五一—八。「追記も参照のこと」

七三・二五 water-tanks : 「水容」(大谷、仙北谷)「水入れ」(平井)。「蚊」にて同じく瘤寺の墓地に言及する箇所があるが、そこでは⁽⁸⁾この語は「水ため」という日本語と共に用いられている。

七四・二 the manji, or swastika : 「卍 (梵語の Svastika)」(平井)。swastikaは梵語として引いてあるのではなく、「まんじ」という日本語に対する説明の英語として置かれているのである。swastika (OEDの見出し語形には swastika の

他にヴァリアントとして *svastika* もある) は梵語起源の外来語ではあるが、既に英語としても熟している。用例としては、「巩固め」の英語は *octopus-hold* または *swastika* ともいう。

七四・四 the Mahāyāna philosophy : そのまま訳せば「大乘哲学」(大谷)であり、わざわざ「大乘仏教」(平井、仙北谷)とひねくれて訳す正当な理由は見当たらない。先日八雲に関するある学会発表を聴いた折に感じたのであるが、仏教の中で哲学的議論をする一派が大乘仏教であるとする考えが一部にあるらしい。もとより仏教史の上での命名が如何にあるかということではなく、八雲の理解に基づいて考えてゆかねばならない問題であるが、いずれにしてもそのまま「大乘哲学」と訳しておいて不都合はない。この問題については the Higher Buddhism の訳語をも含めて別途に論ずるであろう。Cf. 八五・一一—一三三、八六・一五一—一六。

七五注一・ストゥーパに関する比較的長い注であるが、平井は断わりなく省略している。

七六・五 Earth : 平井は常に「土」を当てているが、五行と混同したのである。五大の一要素の場合は「地」が慣用である。

七六・二〇—二二 by the help of the following Shingon classification : 「真言の分類」(大谷、平井)では意味不明。真言宗で用いられている分類、である。仙北谷は正しい。

七六・二三以下八雲は仏教の術語に対してローマ字転写による梵語を並記している。付加符号をも添えて正確を期そうとしている姿勢は何えるが、しばしば正しくない表記が見られる。但しこの誤りがいずれに由来するかの判断には困難が伴う。当時のローマ字転写方式は今日一般的に用いられているものと同じではないからである。例えば「智」に対しては常に *grāna* と表記されているが、語頭の子音は硬口蓋音である。当時は硬口蓋音の閉鎖音も軟口蓋音の閉鎖音も共に *ra* (無声音であれば *ra*) で以て転写されていたが、区別をするために、前者の場合にはイタリック体で印刷された。従って八雲の表記はイタリック体でできなかつたという技術上の問題に由来するものであろう。その他

付加符号の誤りなどは、印刷上の誤りであって、校正し切れなかったものかもしれないし、また八雲自身の誤記かもしれないが、これの判定は原稿を見るまでは不能である。「実は本作品の草稿が数葉残されている。この問題を確定するには必ずしも十分な分量ではないかもしれないが、八雲自身の表記は印刷本から想像されるよりも正確であるというこの一端は伺える (cf. AA XIII)」。しかし誤りの淵源が奈辺にあるにせよ、訳の中でそれをそのまま引いたり、誤った表記に基づいたカタカナ化をなして「グニヤーナ」(大谷)などと表記することが適當ではないことは言うまでもない。本稿では今日一般的に用いられる転写方式によって、正しい梵語形を与えておく。⁽¹⁰⁾

七六・二四 Dhârma-dhātu-prakrit (prakriti の誤り) -gñāna: dhârma-dhātu-svabhāva-jñāna. ㄱㄹ는 Nāmasaṅgīti 59 による梵語形であるが、八雲の与える形の出所は不明である。

七六・二八 Mahā: Mahāvairocana Tathagata.

七六・二八—二九 “holds the seal of Wisdom”: 諸訳は術語であることを示すために引用符で包んでいる用法を見落としている。「智拳印」を結んでいる、とすべきである。勿論金剛界の大日如来のことを言っているのである。

七七・二 Adarsana°: ādarśa-jñāna. ㄱㄹㄹ도 Nāmasaṅgīti の挙げる語形と八雲のそれとは異なっている。

七七・五 “Immovable Tathagata” (Akshobhya): 「不動如来」(平井) はこういう名称があるという誤解を与えるので不適である。Immovable Tathagata は単に Akshobhya の音写である阿閼如来の字義を英語で与えたものである。で、大谷、仙北谷の様に、訳さないのがよい。なお悶の字は本来漢字になかったものであるが、音写のために訳経者がつくったものという。古い用例は『道行般若経』大八・四五八上二〇。

七七・一二 Myō-kwan-zatsu-chi. 九四・二一では Myō-kwan-satsu-chi と表記している。通常は「みょうかんざつち」と読まれているのであるが、八雲の表記は漢字を一字ごとに音写しようとした結果であろう。

七七・一三 Pratyavekshana-gñāna: pratyaveksana-jñāna.

七七・二〇 Kṛtyānushthāna-gṛāna: kṛtyānushthāna-jñāna

七七・二五 Sakyamuni : Sakyamuni.

七七注一 These relations ... are not ... fixed in the doctrine ... for obvious philosophical reasons. : 「・・・關係は、この教義に於て、恒久的に定つて居るのでは無い、——それは哲學的に明白な理由に因つてである」(大谷)「・・・關係は、教義の中で永久不変とされているわけではない——考えてみれば明白な理由のあることである」(仙北谷)。關係が定まつていないことに、明瞭な哲學的理由がある、というのではどうしてもおかしい。だから仙北谷は philosophical を訳さなかつたのであろう。for obvious philosophical reasons は in the doctrine を言い替えたものである。平井は正しく理解している。

七七・一一一八…このパラグラフについては、どの訳を読んでも意味を了解する読者はまずいないであらう。これは訳者の責任というよりも、八雲の原文が相当に分かりにくいものになつてゐるからである。そもそも卒塔婆に書かれてゐる文字から話が出発してゐるのであるが(七五・一六、七六・二二)、この卒塔婆は⁽¹¹⁾どうも板塔婆のことを指してゐると思いきや、七五注一にてインドのストウパーパから説き起こし、その意味するところを広げ、次に大円鏡智などが書かれてゐると言うので、角塔婆を念頭に置いてゐる様である。そしてこのパラグラフで五智、五大と梵字の關係に言い及ぶのであるが、角塔婆では四面しかないので、五つを書くことはできない。つまりここでは、五輪塔の構造とそこに彫られる梵字のことに話が摺り変わつてゐるのである。勿論板塔婆も角塔婆も五輪塔の構造を基礎に置いてゐて、それだからこそ上部に五輪塔をかたどる切れ込みが入れてゐることは八雲も指摘する通りである(七五注一)。

七八・一以下…この段落は明快な文章を旨とする八雲のものとしては、錯綜してゐて分かりにくい。八雲自身充分内容を咀嚼して書き下ろしたか否かも不明である。従つて訳者自体がこの段落の内容を理解する予備知識を持ち合わせていないと、翻訳は不能である。

七八・三 by an extraordinary use: 「使いわけ方で」(平井)。特殊な使用方法によって。

七八・一〇—一二 Ra, Ran, Rañ, and Raku …: Kya, Ken, Keñ, and Kyaku: 日本語のローマ字表記としては、奇妙な綴りである。しかもこれらの梵字の中には長母音の後に鼻音が置かれるものはない。従って和訳も注記がない限り、不適切なものとなる。東(発心門)南(修行門)西(菩提門)北(涅槃門)という通常の順で記せばそれぞれ、「キヤ・キヤア・ケン・キヤク」「ラ・ラア・ラン・ラク」となる。

七八・一二—十四 By different combinations of the twenty characters …: different Buddhas are indicated: 諸訳は何の断わりもなくただ英文の文字面を日本語に置き換えているが、この英文が示す内容は全く理解不能である。実は挙げられておらず、また挙げることは不可能である。書かれていることがらの内容を理解することなしに、翻訳は不可能である。

七八・一五—一八 and the indication is further helped by an additional symbolic character …: 五輪塔であれば、五大を表示する梵字の下に「種字」⁽¹²⁾を付加する余地がないので、ここでまた話は板塔婆に戻るのである。

七八・二一 the strange names of divine wisdom: 「神聖なる知恵の名称」(平井)。strange の訳が抜け落ちている。
七八・二八 the multiple value: 「いくつもの語音」(平井)。音のことを言っているのではなく、漢字一文字には複数の意味用法がある、ということである。

七八・三〇 The whole subject …: would require volumes: 「それこそいうに一巻の書物を」(平井)。何冊の本を書くことが必要になるであろう。

七九・四—六 The really attractive part …: mostly consists of sentences taken from the sutras or the sastras: 「その文句が多くは経文、もしくは論部からとられている点にある」(平井)。mostly は consists に掛かる。sutra と sastra (大谷、平井が書く様にサストラではなく、シャーストラ)は、三蔵のうちの経と後代に著わされた教義綱要書の様

なものをそれぞれ指しているので、経典、論書とするくらいが適当か。「経典ないし聖典」(仙北谷)とするのでは何も分かっていないことになる。経典は聖典だからである。⁽¹³⁾

七九・七 the intrinsic beauty of the faith: 「内的な美しさ」(平井)。the faith の訳語が脱落。

七九・一三 the upper and front part: 「上方と前方と」(大谷)「表に」(平井)。表の面の上部に、である。上部に願文を書き、下部には被供養者、供養者の名などが書かれる。

八〇・三 Ether …… 空 …… といった漢字が書かれるのではなく、キャ・カ・ラ・バ・アの梵字が書かれるのである。

八〇・一七―二二: 平井はこの供養文を落としているが、不注意による脱落であろう。

八〇・二四―二七: 廻向文である。八雲の掲げるローマ字読みは、現今の通行のものとはやや異なる。「がんにくどく ぶぎゅうおいつさい がとうよしゅじょう かいぐじょうぶつどう」[宗派間で完全に一致しているわけではないが]。出典は『法華経』大九・二四下二―三。

八一・一〇―一三: 出典は『観無量寿経』大一二・三四三中二六。

八一・一四 the Zen Sect: 「浄土宗」(大谷、平井)。

八一・一六 The Dai-en-kyō-chikyō declares: 『大円鏡智経』という文献があるわけではない。「大円鏡智」でまず切れて、それから「経曰」と続くのである。九四・一三参照。出典は『法華経』大九・三九下五。

八二・二―三: 『諸回向清規式』大八五・六六六上一五―一六にも同文あり。古くから塔婆に用いられていた句の様である。例えば『私聚百因縁集』卷四第十五「離提女事 卒都婆証拋云事」にも現われる。

八二注一: 三悪道に関する注を、仙北谷は省略している。

八二・一五―一七: 出典は『法華経』大九・五八上一五。

八二・二一—二二：『集諸経礼懺儀』大四七・四六七上—一〇にもあり。

八三・一 Hajō-Kongō・八三注一でも Hajō Kongō とある。この誤記の起源は不明。「遍照」(平井 本文も注も)は書き誤り。「遍照」が正しい。

八三・一七—一八及び注四 Anatra. . . 梵語 anuttarā samyak sambodhi (主格形)。日本語「あのくたらさんみゃくさんばだい」。

八三注四 the supreme form of Buddhist enlightenment: 「仏智の最高の形をいう」(平井)「仏の知恵のもっとも高いもの」(仙北谷)。大谷は省略。仏教という悟りの最上のもの。すなわち、この上なく正しいさとり。

八三・二三—八四・一 those performed within one hundred days after death: 初七日、一七日、三七日、四七日、五七日、六七日、四十九日、百ヶ日のことの意味されている。

八四・二—五 on the first, second, seventh . . . and one hundredth anniversaries of the death: 驚くべきことに、日本の伝統行事に関するこのパッセージをすべての訳者が誤って訳している。八雲も正しく記述しようと努力した形跡は見られるが、うまくゆかなかった。the first が一周忌であることは問題ないが、次の second は三回忌である。亡くなった年をも数えるので二年後は三回目になるのである。「三回忌」という言葉を second とした八雲は非常に注意深かったのであるが、その次は七回忌であるから、sixth とすべきであった。以下も同様に数をひとつずつ減らしてゆけばよかったのである。更に加えて八雲の列挙する数字にも不可解なものがある。seventh, thirteenth, seventh は意味しているものが容易に想像がつくからいいとして、次の twenty-fourth が問題である。日本の慣習を列挙すると、「一周忌、三回忌、七回忌、十三回忌、十七回忌、二十三回忌、二十五回忌、二十七回忌、三十三回忌、三十七回忌、五十回忌、百年忌」となり、二十四に当たるものはない。second = 三回忌の対応方式からゆくと、二十五回忌が当たるということになるが、ここだけ数をひとつ減らしたというのもおかしい。訳者達もいぶかしく思った

のか、「二十五年」(大谷)「二十三年」(平井)と調整を試みている。例によって仙北谷は「二十四周忌」として何も考えてはいない。以下八雲の挙げるのは、thirty-third, fiftieth, one hundredth であって、全部で九つの年忌を挙げたことになる。これを「一年、二年、三年、七年・・・」(平井)として十の年忌を列挙するのは、誤訳というのか、ケアレスマスというのか、言葉を知らない。

八五・一—四 Texts or fragments of texts, that at first rendering appeared of the simplest, would yield to learned commentary profundities of significance absolutely startling:「・・・深く考えて註解を加えて見ると・・・」(大谷)「・・・その意味に注釈を加えながら深く読んでいくにつれて・・・教えられずとも・・・」(平井)。經典からの引用、或いは部分的引用の文は、翻訳している初めのうちはとても単純なものに見えていたのだけれど、驚くほど深遠な意味が、優れた注釈の中に伝えられていることが常であった。驚くほど深遠な意味が現われてくるのが常であった。

八五・四—七 Phrases ... would suddenly reveal a dual suggestiveness ... :これを八雲に教えた人は、二諦説を意識していたに違いない。Cf. 八七・二—一五。

八五・九—一〇・・・出典不明であるが、次の様な類句がある。「一華開五葉 結果自然成」『景德伝灯録』大五一・二一九—一八。

八五・一一—一三 In the language of the higher Buddhism ... But in the popular language of Buddhis ... 「大乘仏教の・・・小乗仏教の」(平井、仙北谷)。ふたつの立場が対立的に述べられているのであるが、折角大谷が「高等佛教の言葉では・・・然し、佛教の通俗な言葉では・・・」と素直な訳を与えているのに、後の訳はわざわざ誤りを作り出している。引用句の直前のパラグラフで、教えの二重性を指摘したので、その実例を引用句に基づいて示しているのである。この二重性を大乘仏教／小乗仏教の対立と捉えている限り、仏教史の事実から遠ざかるばかりか、八雲

の理解している仏教にも近づくことはできない。Cf. 七四・四、八六・一五―一六。

八六・一 A great variety: 「大同小異、千差万別であるが」(平井)。「大同小異」英文にはなく、またそれを挿入するいわれもない。

八六・五―七 The Amida-Kyō says: "... back." : 『無量寿経』往觀偈中の句である(大一一・二七三上二三)。塔婆文中の「阿弥陀経曰」というのは、誤りというよりも金石文などに見られるような経名のヴァリエーションであろう。八雲は注一に於いて機械的に Sukhavativyūha 小本に当てたが、大谷はこれに惑わされることなく、『無量寿経』が出典であることを看破し、訳注にそれを記し、事実と齟齬する原注は訳さずにおいた。この処置の意味を平井は正しく理解したかどうかは不明であるが、大谷の訳注は踏襲した。仙北谷には大谷の意図は理解できなかった。原注の訳を与えながら、その中に大谷の訳注を挿入したからである。従って大本が小本に相当する様な矛盾した表現になってしまった。また "The Amida-Kyō ... is the Japanese [Chinese] version of ..." も機械的に "... 小篇の日本語「漢訳」版である」と置き換えただけでは、意味をなさない。「あみだ経とは、スカークヴァティー・ヴューハ小本の漢訳の題名の日本語読みである」とパラフレーズする必要がある。そしてこの注が付せられている引用文は『無量寿経』からのものであるので、今の場所には相応しくなく、次の本当に『阿弥陀経』からの引用文に対する注の箇所に移すと、より適当な処置となろう。

八六・八一―一〇 "In that world ... bliss." : 前述の如く『阿弥陀経』からのものである(大一一・三四六下二二―二四)。注二に於いて、八雲はマックス・ミュラーの梵文阿弥陀経の英訳の相当箇所を引いて、漢訳の方が簡潔な表現になっていることを指摘している。なお八雲は "a verse" と言っているが、偈ではなく長行である。

八六注二 *Buddhist Mahāyāna Texts* : 八雲がしばしば参照させているこの書は富山ヘルン文庫に欠いているか? もし part ii が part i と合冊であれば九一〇番である。合冊でリプリントが出ている。(= UNESCO Collection of

Representative Works—Indian Series) Delhi: Motilal Banarsidass, 1965.

八六・一二—一四 “All living beings ... forsaken.”: 出典は『観無量寿経』大一一・三四三—中二一六である。

八六・一五—一六 But texts like these, though dear to popular faith, make no appeal to the higher Buddhism. 八五・一一—一二の場合と同じく、この文により八雲の言う popular faith と the higher Buddhism が対立概念であることがわかる。ここでも後者を「大乘仏教」(平井)と訳すのはやはり不適當である。仙北谷はここでは「高等深遠な仏教」とするので、訳語としては正しいが、前のパラグラフの訳し振りと首尾一貫を欠き、論述の流れを考慮していないことになる(七四・四も参照)。尤もこの段落の八雲の真の意図も把握が困難である。後続する文で八雲は、

“Indeed, the Mahāyāna texts, describing Sukhāvati themselves suggest its essentially illusive character” とするが、前の文の texts like these もすべて Mahāyāna texts からの引用であったのだから、大乘のテキストが描く極楽浄土は真のパラダイスであるのか、そこも迷いの世界に過ぎないのか、わからなくなってくる。八雲の意中を付度すれば、大乘經典の描く極楽浄土は表面上は一般民衆の信仰を促すために楽園の如くに記されているが、実は深い意味では表面的な安楽によって諸行無常・諸法無我が説かれている、といった理解がなされているのであろう。もしそうであれば、平井の様に「本質的には迷いの世界であることを暗示しているのである」と文末を結んでしまつては、誤訳になる。極楽浄土の属性には、迷いの世界であるのと、真理をさとす世界であるのとの二面があるからである。

八六・二〇—八七・一 a world of jewel-lakes and perfumed airs and magical birds, but a world also in which the voices of winds and water and singers ...: 極楽浄土の形容であるが、平井は——經典(多分『阿弥陀経』)に基づいてであろうが——相当に言葉を付加している。「七宝の池があつて、微妙な香りがして、迦陵頻伽や共命の鳥などというふしぎな鳥がいるけれども、そこにある風の音、水の音、鳥の鳴く声は」。magical birds については『阿弥陀経』では「種種奇妙雑色之鳥」として六種が列挙されている。平井の挙げるのはそのうちのふたつである。なお平

井は共命に「くみよう」とルビをふるが、「ぐみよう」が正しい。そのふたつ次の段落で「微風吹動、諸宝行樹及宝羅網、出微妙音」とあるので、八雲の書く所も必ずしも明瞭ではないが、最後の singers を「鳥の鳴く声」とするいわれはなさそうである。「鳥の歌」(仙北谷)は単に平井を踏襲しただけのものである。尚観経に基づいた著者自身の筆になる極楽のスケッチを多数含んだ書がある。西村公朝『極楽の観光案内』(東京・毎日新聞社、一九九三)。
八七・六一七・『方法甚深最頂仏心法要』大日本仏教全書(鈴木版)二・三五〇上二四—二五に「経云。迷故三界城 悟故十方空 本来無東西 何処有南北」とあるが、どの経かは不明である。『諸回向清規式』大八一・六六〇上 一六一一七、六六二下一七にもあり。

八七・二二—一五 … states … states … conditions: 「境涯・・・境涯・・・境涯」(平井、仙北谷)。大谷は一応「境涯・・・境涯・・・境遇」と訳し分けている。別の単語を用いており、しかもここの議論のキーワード的な役割を担っているものであるから、当然訳語には注意を払わなければならない。恐らくは平井は「境遇」を「境涯」と読み誤り、仙北谷は何も考えずにそれを引き写したものであろう。この段落の理解は必ずしも容易ではないが、仏教の本来の教説に依るのではなく、八雲の理解に基づいて解釈してゆかねばならない。八雲は二諦説的な教説を聴いたのであろうか(〇・八五・四—七)、存在のあり方に二種のものをも想定している。しかも極めて実在論的な色合いの濃い理解をしている。制限を受けた俗諦としての存在 (Conditioned) と制限の無い真諦としての存在 (Unconditioned) である。俗諦的存在が真諦的には非存在であるからといって、善趣 (states of bliss) 悪趣 (states of pain) の存在までもがすべて否定されるわけではない。あらゆる制限「をうけた状態」(conditions) は永続しないから、深い意味すなわち勝義においては、実在しない。究極に実在するのは、最高仏だけである、といったことが述べられているのであろう。再度強調しておくが、我々各人が仏教の教説であると思うものと、八雲の理解する仏教とを、混同してはならない。

八七・二五—八八・二・破地獄偈である。出典は『八十華嚴』大一〇・一〇二上二九—中一。

八八・二〇—二一 The Mind : Buddha: 『観無量寿経』 大一一・三四三上二一である。八雲が注五で出典を明記しているにも拘わらず、平井は「仏説阿弥陀経」とし、仙北谷は無批判にそれを写すばかりである。大谷は正しくこの句を漢字にて引いているので、出典は知っていたのであるが、何故か注五を訳し落としてしまったので、後続の訳者は全滅となった次第である。なおこの句は浄土教学の論師達の議論の主題ともなった有名なものである。

八八注六 Pratyeka-Buddha sastra: 『円覚経』 に対して梵名を推定しているのであるが、八雲の相談役の人物が「円覚」を「縁覚」と読み誤ってこうした題を当てたのである。この梵名を「大智度論」(平井)とする根拠は全く不明である。

八八・二二—八九・二 出典は『円覚経』 大七・九一五上二〇—二一。

八九注三:「これは大智度論にある文句」(平井)は英文原文にないものである。八八注六の訳が誤って混入したのであろう。

八九・一六—一八: 出典は『金剛経』 大八・七五一下二四。

八九・二一: 『法恩講式』 大八三・七五六下二四等にもあり。

九〇・五: 「一仏成道 観見法界」と合わせて有名な句であり、『中陰経』の偈とされてきたが(例えば『方法甚深最頂仏心法要』 日仏全一・三三五上二五)、同経にこの偈はない。『宗門無尽灯論』 大八一・五八二中七一八にあり。

九一・二 various Japanese commentaries upon both: 「日本にあるその方面のいろいろな注疏」(平井)。「日本撰述の様々な経疏・論疏」。

九一・二二—二五: 『秘蔵記』 弘法大師全集 二・三七・一一四、定本弘法大師全集 五・一五一・五—七、弘法大師空海全集 四・七八—七九。

九一注一 in the Greek: 「古代ギリシヤにおける意味で」(平井)。「古典」ギリシア語 αὐτοῦ の様な意味合いで。

仙北谷訳のこの注の末尾の「引用の英訳は雨森信成による」に当たる英文は無いので、訳者の付加であろうか。根拠は記されてはいない。

九二・五—一一：『四曼義』弘法大師全集 四・二五二・七一八。

九二・一七 Commenting upon: 「批注した」(平井)。平井には時として奇妙な言葉遣いが現われる。

九二・二八—二九 in common parlance: 「ど」でもいう」(平井)。通俗的な言い回し。

九四・一〇—一一 Incomparable the face of …: 「如来慈顔 超世無倫」(大谷、平井、仙北谷)。『無量寿経』讚仏偈中の一句であるが、「如来容顔……」(大二・二六七上三三)が正しい。恐らくは大谷は出典を知っていながらもうっかり書き誤り、後の訳者は確かめることなくそれを引き写したのであろう。

九四・一三 The Dai-en-kyō-chi-kyō says: この表記では『大円鏡智経』という文献があるかの様であるが、「大円鏡智」でまず切れて、それから「経曰」と続くのである(八一・一六参照)。大谷、平井はスペースを空けて(平井は二字分も)正しく理解しているが、仙北谷は八雲式である。ここの銘文は板塔婆でなく角塔婆の一面を写したものであろう。角塔婆は四面に文字が書かれるので、それぞれに五智のうち法界体性智を除く四智が配当されるのである。実例として、瘤寺墓地のすぐ近くにある曹洞宗功運寺の本堂前に建つ角塔婆の銘文を示そう。正面から左周りの順に記す。

大円鏡智 當山 廿四世退董 併 廿五世普山信制之辰報恩記念塔
廿九

平等性智 経曰

我此土安穩天人常充滿
園林諸堂閣種種宝莊嚴

妙觀察智 平成八年十一月 三日當山新命恭建之

成所作智 銘云 道本圓通爭假修證

宗乘自在
何費功夫

九四・一六一一九：出典は『金剛經』大八・七四九中一。

九五・七一― A verse of the Amitayur-Dhyana Sutra : the sands of the Ganga : 「觀無量壽經のなかにある偈——」・・・化伝」(平井)。出典は正しいが、偈ではなく長行である(大一二・三四三中二―三)。英語原文には verse とあるが「一句」(大谷、仙北谷)は流石である。引用の最後の「伝」は「仏」の誤植。仙北谷は漢文を引いた後に現代語訳を与えてあるが、「多くの仏たちが」は「多くの化作された仏たちが」と補って訳す方が、英文にはなくとも、正確である。

九五・二二―二三：出典は『法華經』大九・五八中一。

九六・四―五：「教化衆生」だけは『法華經』大九・二七下―一に出づ。

九六・一九―二一 Kai yo ken pi ryō-nyō jō butsu : 八雲自身が出典を記している様に『法華經』の一節(大九・三五下二〇―二二)を前提とした句である。ただし八雲が参照させるのは、ケルンによる梵文からの英訳本「富山ヘルン文庫九〇一番」であり、羅什訳のこの句に相当するものは梵文にはない。

九六・二二―二三 Sagara, the daughter of the Naga-king: the daughter of the Naga-king, Sagara とするのが正しい。⁽¹⁴⁾「娑竭羅」(仙北谷)は「娑竭羅」の誤植。

九六注三 Japanese title of the Sa : 諸訳は無視している。「Saddharmapundarika-sutra の「漢訳の」題名の日本語読み」。この文は、八雲が梵文法華經と中国・日本で広く読まれてきた羅什訳『妙法華』の本文が完全には一致

しないことに、感じていたことを示唆する。

九七・一六—二一 ranging from the unhewn boulder ... to the complicated turret (kagé-kio) ... with a spire of umbrella-shaped disks or parasols (Sanskrit: chātras): 挿入されている日本語 (??) kagé-kio は不明である。諸訳もこれを無視。梵語の方は明瞭で、chātra が正しい。「天蓋」などと訳されている。

九九・五、八・戒に相当する梵語の綴は *śīla* である。

九九注一 Ju-kai-e: 「百戒會」(大谷) 「受戒會」(平井) 「授戒會」(仙北谷)。大谷の訳はその根拠不明。戒は授けるのであるから、仙北谷が正しい。

一〇一・一七 “mansion”: 「殿」(平井、仙北谷)。このパラグラフの主題が院であることは、一〇一・一 “in” or “mansion”, 一三 “mansion”, 一四 “in” より明らかであるから(これらは諸訳で一致して「院」と訳されている)、「in」は当然「院」でなくてはならない。大谷は判断しかねた結果「宮殿」と意識してしまった。一〇一・二〇 The word に対する「殿」(平井)も「院」と訂正されねばならない。

一〇二・五 Chion-in: 「智恩院」(大谷、平井、仙北谷)。知恩院が正しい。この寺にまつられている法然のおくり名である華頂尊者の名は華頂山という山号に留められているが、知恩院は法然の院号ではない。八雲はその名に院を持つ寺の例として、瘤寺すなわち自証院を挙げるべきであった。そこにまつられているのは尾張大納言光友の簾中千代姫の母、自証院殿光山暁桂大姉であり、故人の院(殿)号と寺の名が一致している好個の例となっているからである。実はこのことは一〇六注二で述べられているのであるが、注に廻さず本文中に置く価値があった。

一〇二・九—一三 Buddhism met the difficulty by conferring ... and affixing ...: 「・・・想像的の佛寺若しくは『院』の名を加へるといふことが困難なことに佛教はなつて来た」(大谷) 「・・・想像上の『院』もしくは『殿』の名前をつけることが困難なことになってきたのである」(平井)。想像上の名前を付けることは全然困難ではない。

meet the difficulty by (ing) は、()することによって困難に対処する、という意味である。仙北谷は正しく訳している。また平井の「想像上の「院」もしくは「殿」が原文の an imaginary temple or "mansion" に妥当しないことは言うまでもない。

一〇二・二二—二三 ecstasies and powers and splendors and luminous immeasurable unfoldings: 「法悦、神力、無量光」(平井)「法悦と仏の力と四方に広がる無量光」(仙北谷)。四つの項目が拳がっているのに、訳では三つしかない。splendors が飛ばされている様である。大谷は「歡喜や威力や赫灼や光り輝く無邊際の開展」と対応が正確である。

一〇二・二四—二六 escape from the Six States …: 要するに、輪廻からの脱出、すなわち解脱が意味されているのである。

一〇三・一 the cemetery of Kobudera: 現在は墓地だけが移転していて、中野区上高田四丁目十二にある。筆者は一九九七年八月十日(日)と十三日(水)の二回調査に訪れたが、この墓石は見い出せなかった[付録参照]。

一〇三・三 Mahāsthāna: 正しくは Mahāsthāmaprāpta である。

一〇三・一〇 Shōtoku Ni: 「シャウ・トク・ニ・ネン・・・正徳二年」(大谷)「正徳二年」(仙北谷)。八雲のローマ字転写にはない「年」の字を勝手に付加している。

一〇三・注二 Rein's Japan: 富山ヘルン文庫九八一番。

一〇三・一八—一九 in small capitals: 「大文字で」(平井、仙北谷)となっているのは、実際に訳書ではローマ字転写のその部分を大文字で与えているからである。しかし付加符号のあり方は、どちらも八雲のそれと完全に同一ではない。

一〇三・二二—二三 changeless condition of good: 「変らぬ操」(平井)。こゝは「松」の字が象徴することを言っ

ているので、「よい状態が変わらないこと」を意味する。「貞松」となって初めて「変らぬ操」の意味になる。

一〇四・二 exercise of virtue: 「修行の姿」(仙北谷)。徳の実践、である。

一〇四注一: 大谷は訳注にて、偶々西田の戒名と同じものに遭遇したかの様に書いてあるが、友情から西田の戒名を世に伝えたのである、と述べている。この推定は正しく、下書きでは、わが友西田の戒名は、としてこれを引いている (cf. AA XIII)。

一〇五・一 - Snowy-Peak: 「雲峯」(平井)。雪峯の誤植。

一〇六・一四 - 一五 Waking-to-Dhyāna-at-the-Bell-Peal-of-the Wondrous-Dawn: 「妙音禪覚」(大谷、仙北谷)「妙音澄覚」(平井)。英語からは六文字が推定される。例えば「妙暁鐘珠禪覚」とか。

一〇六注一 "the seventeenth year of Kwansei" (1640 A.D.): 「寛政十七年(紀元/西暦一六四〇年)」(大谷、平井)。自証院殿の没年は寛永十七年(一六四〇年)であるので (cf. 『プリンス通信』一五六号六二頁)、八雲が年号を書き誤ったのである。仙北谷はこれを正している。

一〇七・一四 Kaishi: Daishi の誤植。

一〇七・二七、一一〇・七 the-Plumflower-Chamber: 「梅室」(大谷、平井、仙北谷)。「梅舎」の可能性もあり [付録17番]。

一〇七・二九 Virtue-fragrant-as-the-Odor-of-the-Lotus: 「蓮誉妙薫」(大谷、平井、仙北谷)。誉と妙に対応する英語がない。「蓮香徳芳」くらいか。

一〇八・一一 Dewy-Light: 「露幻」(大谷、平井、仙北谷)。幻は Phantasm と対応している様なので (一〇九・四、八)「露光」か。電光朝露の様なはかなさを表わしているのであろう。

一〇八・二三 Fragrant Trees: 「法樹」(大谷、平井、仙北谷)。法 = Law (一〇三・一三、一〇四・二六、一〇五・一四、

一〇八・一九) 芳 = Fragrant / Fragrance (一〇七・一八―一〇八・七、一〇九・一四) の対応を考慮に入れて、「芳樹」。

一〇九・一六―一七 to divine the meaning of most of the kaimyō above given: 「上に挙げた戒名の意味は、おおよそわかり」(平井)。most は divine に掛かるのではなく、「……ほとんどの戒名……」、「もしくは「……戒名のほとんど……」である。

一一〇・一四―一五 Effective-Benevolence-Listening-with-Pure-Heart-to-the-Supplications-of-the-Poor: 「聴願行仁」(大谷、平井、仙北谷)。六文字か八文字が推定されるが、復元は困難である。Pure-Heart は浄心か。

一一一・三 beauty and grace: 「厳しさと優美さ」(平井)。美しさと優しさとである。

一一一・一〇―一一 a snowy bubble: 「泡雪」(平井)。雪泡である(一〇九・二、一一一・二)。

一一一・一一―一二 all forms must pass: 形あるものはすべてうつろいゆく、諸行無常ということである。

一一一・一三―一五 only the divine Absolute dwelling in every being ∴ forever endures: 「ただ、万物のなかにある「絶対」だけが……永遠に生きていくのである」(平井)。すべての存在に宿っている神聖な〈絶対〉だけが、永く存続するのである。相对主義の仏教を八雲がどのように捉えているかは、更に慎重に考察してゆかなくてはならない。

一一一・一三―一五 Mitford's "Tales of Old Japan": 富山ヘルン文庫九七二番。リプリントが出ている。A.B. Mitford (Lord Redesdale), *Tales of Old Japan* (Rutland-Tokyo: Charles E. Tuttle, 1966), pp.15-42 "The Forty-Seven Ronins." 教科書版にも再録されている。H. Ito and M. Iki, eds., *Oriental Tales of Terror* (Tokyo: The Shinozaki Shorin Press, 1981), 36-49.

一一一・二六―二七 an appropriate military suggestiveness: 「武士道的暗示が濃厚に」(平井)は不適。「彼らにふさわしい武士的な暗示」(仙北谷)がよい。「相當な武士的暗示」(大谷)は意味がよくわからない。

一一一・二八一二九、一一二・四 his followers: 「あとの連中」(平井)。彼の家来達、である。

一一二・一—二 “Dagger. . . in the Mansion of Earnest Loyalty.”: 「志誠院 . . . 」(平井)は「忠誠院 . . . 」の誤植。四十七士の戒名は、『泉岳寺義士銘々傳』(東京・泉岳寺、一九八七、一九九一)、『元禄義挙年譜 赤穂義士一覽』(東京・中央義士会、一九八六、一九九五)、和賀勲良『自分で作れる 戒名 法名』(東京・ナショナル出版、一九八四)、八〇—八二にすべて記されている。

一一二・三 the historic meaning: 「史的意義」(大谷)。物語の上からの意味、もしくは意味の由来、である。

一一二・四—五 Three of the kaimyo of his followers will serve as examples of the rest: 「あとの連中の戒名は、他はこれに準ずる意味で、三つだけ挙げておこう」(平井)。家来達の戒名については、三つを挙げれば、残りのものをも示す例として役立つであろう。

一一三・一五—二七 In the rendering of Chinese sentences this duty presents itself under a peculiar aspect: . . . 別種の様相のもとに現われてくる」(平井)「. . . 別種の様相のもとに姿を現わしてくる」(仙北谷)。別種ではなく、特にそこに固有な関係を持って、ということである。「漢字ばかりで書かれた文章を「英語に」訳す時には、この「異国の信仰を大きな度量をもって理解するという」義務が特にこの作業に必要であるといった態で現われてくる」。「一種特殊な方面に現はれる」(大谷)はやや的外れか。

一一四・二—五 the thought conveyed . . . which are very different things indeed from “written words.”: 「. . . ふつうの「書きことば」とは . . . 」(平井、仙北谷)。書きことばでは意味が通じないし、それに当たる英語は written language である。「原文にある表意文字である漢字を見ることによって東洋人の心のうちにイメージされる心象、それは単に書かれている文字面の意味とは全く異なったものなのだ」。大谷の「『書いてある語』とは実際非常に異つて居る」はよい。

一一四・五—八 The translations ∴ were made by Japanese scholars, and ∴ have the approval of competent critics. ∴ 七三・一五—一六に反して、助力者は複数になっている。

一一四・一二—一四 ∴ 「日本の俗謡にみられる仏教的なもの」参照。

*** — *** — *** —

以上により、最初の訳である大谷訳の価値が再確認されたかと思う⁽¹⁵⁾。誤解がない用に再度強調しておくが、小稿はそれが目的であって、他の二訳の批議をこととするものではない。平井訳の些細な点までを取り上げ過ぎたという印象があるかもしれないが、今日平井訳はまとまった個人訳としては最大のものであり、最も広く参照されるものであるから、これに対する吟味を加えておくことは意義のあることでもある。こうした論説文はともかくとして、再話ものの平井訳は名訳といってよいものである。また仙北谷氏が優れた八雲研究者であると評される(河島弘美「書評∴仙北谷『人生の教師ラフカディオ・ハーン』」『比較文学』三九(一九九六)、一一四—一一七)ことに筆者も全くの同意を抱くものである。

ただしいずれにせよ、八雲の主要作品の殆どが一応訳出されている現在、新訳を世に問うには、それ相当の手続きを経なければならぬこともこれまた否定はできない。

〔付記〕小論脱稿直前に、加藤政久『石仏偈頌辞典』(東京∴国書刊行会、一九九〇) ∴ 『続』(一九九三) ∴ 『続々』(一九九六)の存在を知り、参照した。石仏、板碑に刻まれた仏典の文句の多数の出典を突き止めた大変な労作である。今回は部分的にしか利用できず、当初から利用できなかったのが残念であるが、今後類似の作業をするにあたっては、先ず第一に参照すべき書であることを確認しておく

たい。

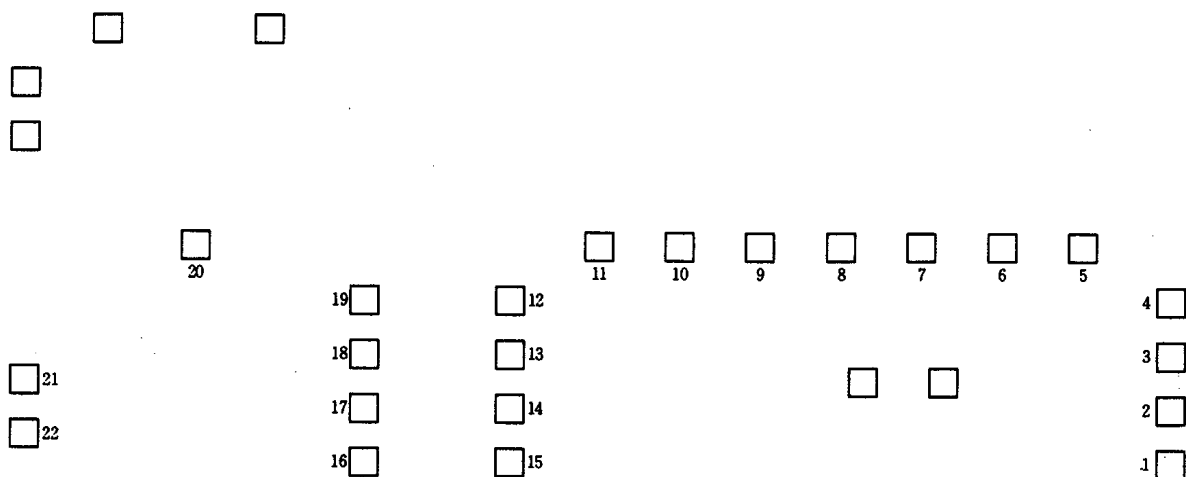
付録…瘤寺墓地に見られる戒名と卒塔婆

富久町にある現在の瘤寺には墓地はない。墓地だけが中野区上高田に移転しており、古い墓石もそこへ移された。筆者は一九九七年八月にその調査に赴いたが、八雲が特に瘤寺の墓地に見たと記した墓石は見い出すことができなかった。(cf. 一〇三・一への注記) また大谷訳に記される様な戒名の刻まれている墓石も不明である。現在の墓地の大部分は八雲以降のものが大半であるが、まだ江戸時代の年号が記されているものも若干は残っており、それらが富久町に置かれていた時には八雲は目にしたことであろう。江戸時代の墓石は図に示す一角に比較的多く見られるが、その一群の墓石に刻まれた戒名を列举しておこう。大谷の復元の確認もしくは訂正をもたらずものは乏しいが、復元の再検討の際の参考資料としての役目は果たすかもしれない。(梵字の刻まれた箇所はカタカナでその読みを記す)

- 1 櫻讚院晴霞妙光大姉
- 2 アーнк 秋峯空山信士
- 3 ア 唯稱院得往寶訓大姉靈位
- 4 ア 完壽院仙岳智栄比丘尼
- 5 園了院甚雲妙空大姉塔
- 6 眞空院圓涼覺夢居士
- 7 フー 隨縁院際眞實如信士塔
- 8 アーнк 義元院圓道寂翁居士

- 9 須照院秋月圓成居士
- 高林院寒月妙照大姊
- 10 松巖院貞質忠融居士
- 榮松院貞從妙安大姊
- 11 雪草妙消童子
- 綠園院果得妙實大姊
- 夢還妙性童女
- 12 體空院春曉了岳居士
- 清養院春月妙空大姊
- 珂月妙性童女
- 13 孝順院乘頤得生居士
- 芳心院慈室豐壽大姊
- 14 唯香妙薰童女
- 德生院智月明照居士
- 淨刹清涼童子
- 15 玉泡惠消童女
- 16 蓮遊童女
- 妙貞童女
- 如童女

無縫塔群



- 17 智鏡院節心明恵大姊
蓮迎院浄顔妙貞大姊
旭峯桂林童子
智玉童女
梅舎童女
- 18 法施院参□妙薫大姉靈位
- 19 善□院殿從四位前備前守夸延泰岳大居士
- 20 定禪院恵岳浄智居士
智光幻夢童子
- 21 法光院一翁道景居士
如心院性壽妙承大姉

卒塔婆は板なので新しいものしか残っていない。一例だけ示そう。

キャ・カ・ラ・バ・ア・キリーク 茲宝塔者為淑茂妙福信女五十回忌追善大菩提

- (1) この副題の意味については、『プリンス通信』一五八(一九九七年七月)、六一九頁注一参照。
- (2) Cf. 「ハーンの全体像がなかなか見えてこないのは・・・ハーンのジャンルの多岐性と文学活動の空間的な広範さという二つの要因がからみ合って生じている・・・」(池田雅之『おとぎの国の妖精たち』(『現代教養文庫 一五八〇』(東

京：社会思想社、一九九五、三二七)

(3) 墓碑銘への関心は、既にアメリカ時代に起こっていた。「葬送文学」の冒頭に墓碑銘が引かれるが、これはバイロンからのものである。「ジェイムズ・カーワン博士の御示教による。」八雲とバイロンとの関わり全般については、鶴飼祥子「小泉八雲とバイロン」『常葉英文』六(一九八六)、三四―三七を参照。詳しくは『プリンス通信』一七一号六七九―六八〇頁。

(4) 今回英文の初版本(一八九八)は参照できなかった。*Wings*のみしか参照していないので、以下の議論の中で本文の表記上の細かい点に関しては、訂正を要することも出てくるかもしれない。しかし *Wings* 所収の本文が通常最も広く用いられるものであるから、それに基づく議論も全く無為というわけでもなからう。その他のエディションについては、錢本健二「小泉八雲コレクション国際総合目録」(松江：八雲会、一九九一)、A0388-A0396:『補巻』(一九九二)、A1770-A1771。

(5) 平川祐弘「まえがき」『怪談・奇談』(≡小泉八雲名作選集)(≡講談社学術文庫 九三〇)(東京：講談社、一九九〇)をも参照。

(6) [Ed.] "Japanese Buddhist Proverbs." *The Writings of LH 3*, 324. [Tr.] 『小泉八雲全集』六(東京：第一書房、一九二五)、一五八 [大谷正信訳]。『全訳小泉八雲作品集』九平井呈一訳(東京：恒文社、一九六四)、一三四 ≡ 『日本雑記他』(東京：恒文社、一九七五)、二三四。

(7) 石一郎「小説小泉八雲」『すばる』三卷一―号(一九八一年一月)、二八七―二八九。

(8) [Ed.] "Mosquito." *The Writings of LH 11*, 293-313. [Tr.] 『小泉八雲全集』七(東京：第一書房、一九二六)、三一五―三三〇 [大谷正信訳]。『怪談——不思議な』との物語と研究——』平井呈一訳(≡岩波文庫2513-2514)(東京：岩波、1994)、一五八―一六三 ≡ 『小泉八雲全集』八(東京：みすず書房、一九五四)、一六九―一七四 ≡ 『全訳小泉八雲作品集』一〇(東京：恒文社、一九六四)、三二八―三三三 ≡ 『怪談・骨董他』(東京：恒文社、一九七五)、三一八―三三三 ≡ 『動物たちの物語』(≡ちくま文学の森二二)(東京：筑摩、一九八九)、一八七―一九三。『天の川幻想』ラフカディオ・ハーン珠玉の絶唱』船木裕訳(東京：集英社、一九九四)、一七九―一八六。

(9) これについては、松村恒「ハーンの指摘する『カタールサリットサーガラ』の英訳をめぐる」『榊井幹生編』『小泉八雲に親しむ』パート4 (京都：京都府立大学、一九九七)、二頁注五に挙げたものを参照。八雲は主として、Sacred Books of the East の方式に従っている様である。

(10) 日本語のローマ字表記にも訂正を要するものがある。例えば「如来」に対しては常に Nyorai と表記されている。しかしこれらは日本人にとっては自明であるものが殆どであり、諸訳者達は誤り無く日本語に還元しているので、いちいち注記はしない。また「法界体性智」は通常「ほっかいたいしゅうち」と読むが、八雲は Ho-kai-tai-sho-chi と転写している。これは漢字を一字一字区切って読んだ結果であろう。また梵語・日本語共に長母音を指示する > と | の違いについては、繁鎖を避けるため、考慮の外においた。

(11) この注の中で八雲は stupa と sotoba を一応使い分けようとしているので、どちらにも一様に「卒塔婆」を当てる翻訳は不適である。なお仙北谷は stone stupa の stone を訳し落としているので、意味が不分明になっている。

(12) 伝統的には宗派によって違う読み方がなされていたが、今日では唯識の術語の場合は〈しゅうじ〉、仏その他を象徴する梵字を意味する時は〈しゅじ〉と読むのが一般的である。

(13) ただ八雲自身がどの程度まで、このふたつの語を厳密に使い分ける意識があったかは分からない。というのも、ほぼ等しい価値を持つ文章に、八一・八では Sutra text とし、八一・一五では Sastra text としているからである。

(14) 八雲はこの物語が気に入っていて、「永遠の女性」では全文を引いている。[Ed.] "Of the Eternal Feminine," *The Writings of LH 7*, 83-84. [Tr.] 『小泉八雲全集』四 (東京：第一書房、一九一九)、一〇七—一〇八 [戸澤正保訳]、『東の国から——新しい日本における幻想と研究——』上 平井呈一訳 (『岩波文庫 四六二五—四六二六』(東京：岩波、一九五二)、一二三—一二五) 、『全訳小泉八雲作品集』七 (東京：恒文社、一九六四)、一一九—一二二) 、『東の国から・心』(東京：恒文社、一九七五)、一一九—一二二) 、『小泉八雲作品集』二——随想と評論—— (東京：河出書房新社、一九七七)、一一三—一一四 [仙北谷晃一訳] 、『日本の心』(『小泉八雲名作選集』(『講談社学術文庫 九三八』(東京：講談社、一九九〇)、五〇。最後者は『法華経』第十一品) に (ママ) を付しているが、ケルン訳に基づいた梵本と、先行訳が用いている羅什訳との相違をまるで顧慮していないためである。

(15) 従って大谷が「第一書房版『小泉八雲全集』刊行のさい、幾つかの拙劣生硬な訳業を残した」(『ラファカディオ・ハー
ン著作集』一四(東京・恒文社、一九八三)、三六三)という発言は、訳書を読まずになされたか、或は読んでもその
価値を理解できずになされたかのいずれかである。『プリンス通信』一七二号六八五―六八六頁をも参照。

〔追記〕 瘤寺墓地等については、自證院副住職館亮繁師にお教え頂いた。また弘法大師関係の書については、東方出版の板倉敬則さ
ん並びに密教文化研究所の甲田宥畔先生より御助力を忝けなくした。厚く御礼を申し上げます。

脱稿後雨森信成より八雲苑の書簡の中で、本作品の中で扱われている戒名について論じられていることに気付いた。同書簡の翻訳は未
だないが、小泉家の了解を頂いたので、別途に和訳と注解を発表する予定である。

八四・九―一に見られる年忌の特殊な名称の同定については、『へるん』誌の次号にて論ずる予定である。